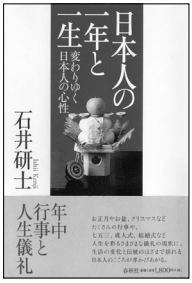
紹　介

石井研士著

『日本人の一年と一生―変わりゆく日本人の心性―』

春秋社　平成十七年二月刊　四六判　二三二頁　本体一八〇〇円



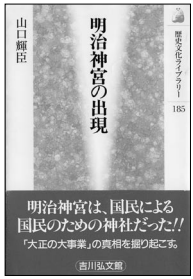
日常生活の中でいとなまれる年中行事と通過儀礼をテーマに、現代日本人の宗教性の変容を考察。儀礼文化の「現状を理解するためのキーワードが「持続」ではなく「変容」である」（まえがき）との視点は、長年の研究で培われたものだ。第一章「年中行事」では、大学生へのアンケート調査から、①「民俗学が年中行事として分析の中心に置くような行事の大半は都市の生活からは脱落している」こと、②「伝統行事の変容」、③「戦後盛んになった年中行事の存在」という特色を指摘する。②の場合、例えば家に年神を迎えるための門松・正月棚などの正月行事の実施率が低下していること、初詣の実施率がきわめて高いものの一社集中や氏神離れ（つまり神社離れ）が顕著なこと、「ゆく年くる年」の映像に「歳の暮れらしさ」と「新年の正月らしさ」を求める心性などがあげられる。③については日本製キリスト教行事としてのバレンタインデー・ホワイトデー、クリスマスなどを取り上げている。これらは必ずしも商業戦略のみで普及したのではなく日本人の選んだ「幸せの形」（ひとときの聖性の希求、互酬性など）である、との指摘は示唆的である。第二章「通過儀礼」では、高度経済成長期以降、「儀礼を行う母体が、集団〔地域社会・家〕を基盤とするものから個人や、狭い個人の集団としての家族へと移行」し、伝統儀礼が多様化または消滅したことと、家における儀礼（出産や死にかかわる民俗儀礼）の消滅はやがて「伝統的な世界観の消滅へとつながる事実」を指摘する。本章の「結婚式」については、本誌所収論文や近著『結婚式』（NHKブックス）でより詳しく触れている。とりわけ神道者は、「年中行事から生育や生命力の更新が失われていき、通過儀礼から魂の成長や再生が消えていったときに、私たち日本人の魂はどこへいってしまうのだろうか」（最終章）という警鐘をこめた問題提起を、真摯に受け止めなければならないであろう。

紹　介

山口輝臣著

『明治神宮の出現』

吉川弘文館　平成十七年二月刊　四六判　二三二頁　本体一七〇〇円



明治神宮創建前後の歴史的考察を様々な角度から試みる労作。明治神宮が出現する過程は、「そのままひとつの大正時代史となるような事件」であるという。本書においてそれは、つくられた理由、位置の選定、外苑の存在理由に焦点を当てることにより、照射される。

明治天皇崩御後、国民の間から盛んに起こった哀悼の言葉は、特に新聞により伝えられたが、その哀悼の念を形に表す時には、「記念」という言葉が使われた。しかし、記念事業内容には人それぞれの思いがあり、博物館・図書館・美術館・科学院といった文化施設、職業紹介事業の拡充といった社会事業、そして神社、植樹など…雑多な意見により構成されていた。その中で、「天皇陵を東京へ」という運動が、京都桃山への陵墓確定により座礁した後、天皇陵の代わりとなる記念としての「神宮を東京へ」という運動が持ち上がった。その「神宮を」についても、「東京へ」についても様々な批判があったが、運動の主導者であった阪谷芳郎や渋沢栄一はそうした意見をも取り込んだ画期的なアイデアを産み出す。そして、大正政変などに阻まれながらも、帝国議会貴族院での請願可決、衆議院にての建議可決により、民間経済人主導から政府による造営へと進んでいく。

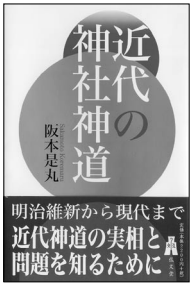
大正二年から三年にかけて神社奉祀調査会が開会され、造営のための調査が進められた後、大正四年五月の内務省告示により、正式に明治神宮の創立は発表された。そして、内苑は国家が、外苑は国民が建造するものとされ、国民からの寄付金が集められた。さらに、全国からの勤労奉仕青年団が造営に参加したことが、「明治神宮が国民のものであると意識されていく」ことに寄与した。まさに「国民のための神社！」と、山口氏が記すように、その明治神宮の造営までの過程は、確かに国民による国民のためのものであったことが本書によって了解されるであろう。

紹　介

阪本是丸著

『近代の神社神道』

弘文堂　平成十七年八月刊　四六判　二八六頁　本体二二〇〇円



本書は、明治維新から現代に至るまでの神社神道の歴史をめぐる様々な人物や問題に関する著者の論考を一冊に纏めたもの。その対象は、「神社を中核とする日本人の伝統的神祇信仰・崇敬によって起こるあらゆる現象」である。近代の神社神道が、国家の「行政事務」に限定された「国家神道」としての側面だけではなく、古来より信仰・崇敬されてきた「神社」を中核とする神道（神社神道）として存在した事実、その現象の起源・沿革等を攻究する筆者の願いが本書には込められている。

全体の構成は、「はじめに」「第一章　明治維新と国学者」「第二章　明治維新と神社の改革」「第三章　明治末期・大正期の神社制度」「第四章　国家神道とは何だったのか」「余論　近代の神社と社会の関わりをめぐって」「あとがき」。これらは、筆者の折々の問題意識の発露・確認であると同時に「自分にとって近代の日本とは何だったのか」を問う意識が根底に流れる。

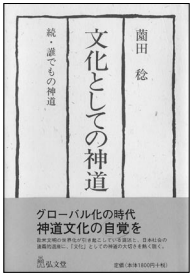
まず、第一章は、幕末維新から明治にかけて活躍した岩倉具視、その周辺の人々、福羽美静の動向、京都・東京の動静、皇室典範と登極令制定の経緯、明治の大嘗祭等についての論考で構成されている。第二章は、明治維新以降の神道の位置づけ、近代神葬祭の光と影、改暦と祭日と年中行事、幟仁親王が明治の神道界に果たした役割等が論じられる。そして、第三章は、日露戦争後の社会と文化、神社合祀策と政府・帝国議会、明治神宮の創建と聖徳記念などについて論じる論考が収められている。また、第四章は、「国家神道」の語義・由来、定義と概念規定・法令・制度、「国家神道」研究の現状、神社制度のあり方について論じられる。そして、余論として、五箇条の御誓文、神社の公共性、古典・神道学についての論考が収められている。本書は、近代の神社神道を考える上で必要不可欠の一冊である。

紹　介

『文化としての神道―続・誰でもの神道―』

薗田稔著

弘文堂　平成十七年十月刊　四六判　二二六頁　本体一八〇〇円



著者が平成五年から十七年にかけて公表した現代神道論の集成で、『誰でもの神道』（平成十年）の続編。序章に収録された「文化としての神道」（書き下ろし）が、本書全体の基調をなしている。ここでは著者が持論としてきた、「文明」（都市性・普遍性を内包するユニバーサルなもの）と「文化」（農村性・土着性・風土性を帯びたローカルなもの）の区別によって現代のグローバル化・国際化を認識することの有効性、および神道を「教団宗教」ではなく「宗教文化」（あるいは共同体宗教）として把握することの学問的・実践的妥当性の二点が提唱される。ついで第一章「文化の不良債権」では、「近来の日本社会に頻発する深刻な人災も、私には何か文化面での過去五十年来の不良債権のツケが一挙に噴き出したように思えてならない」として、伝統的価値観を否定してきた戦後の教育・法制の弊害を指摘している。第二章「日本の祭りと現代」では、「集団の総合的な儀礼表現」である祭礼を通して、現代のコミュニティ的連帯を確保する可能性を考察し、「歴史風土」やその「宗教的霊性」との「聖なる交流」（祭礼）によって地域全体を活性化させることの意義を強調する。第三章「鎮守の森の復権」では、「大気中の二酸化炭素を吸収し全生命の母胎ともなる森林を守り育てることが世界中の課題」であり、「日本古来の鎮守の森が、人間と自然の共生する文化として再認識さるべき理由も、ここにある」と説く。第四章「霊的生命観と現代」では、「先祖や自然の働きに眼に見えぬ生命の霊性」（カミ・仏性）を認めてきた「日本古来の霊的生命観」について、神道の「自然風土に根ざす神々とその祭り」を手がかりに考え、グローバル社会が「物心ともに豊かさをもたらす『生命文明』への実現へと歩みだす指針」となる可能性に言及。第五章「一神社人の想い」には故郷の秩父神社や靖國神社に関する随筆を収録する。現代日本の文化的混迷を憂える諸氏に一読をお薦めしたい。

紹　介

佐々木克著

『幕末の天皇・明治の天皇』

講談社　平成十七年十一月刊　文庫判　二八九頁　本体九六〇円

本書は、孝明天皇と明治天皇について、その時代背景・周辺の人物等にも焦点をあてながら、維新変革の前後におけるそれぞれの意識変容に注意しつつ、比較考証する論考である。本書における考察の淵源は、「「天皇制」ではなく明治天皇個人とその身体について分析・検討を加え、歴史研究のテーマとした、おそらく日本で最初に発表された論文」（本書あとがき）とされる著者の論文「天皇像の形成過程」『国民文化の形成』（昭和五十九年）から始まる問題意識にある。その後、さらに研究を進めた著者の本書における考察は、幕末の天皇と明治の天皇の違いを、〈見えない〉天皇と〈見える〉天皇という言葉に象徴させ、二十年間の研究成果をまとめたものである。そして、本書成立の端緒は、鹿児島県史料『鹿児島県史料　忠義公史料』と『鹿児島県史料　玉里島津家史料』を精読したことによる孝明天皇と朝廷・公家についての少なからぬ発見と多くの知見を得たこと、永井和による論証等（「万機親裁体制の成立」『思想』九五七、平成十六年など）が契機となっている。

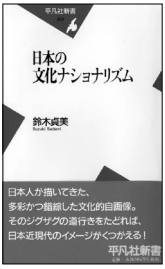
幕末に於ける天皇は、公家と御所に奉仕する人の他には、面会を許された一部の武家を除けば、その顔を拝することの出来た者は稀であった。しかし、それに比して、明治天皇の肖像は、錦絵や模写された石版画の「御真影」などによって、一般の家庭でも見ることができた。その国民への視覚的印象の変容は、近世における幕藩体制の中の天皇と、近代国家の元首としての明治天皇との相違に基づく。そこには、政治空間の変革と同時に、東京遷都による変革も見逃せない。そして、巡幸・行幸による明治天皇と民衆の接点、〈見える〉天皇としての国民統合のシンボルとなる過程も重要である。あわせて、御真影が果たした役割、近代天皇のイメージ形成における史実を、本書により考えてみることは近代を理解するひとつの契機となるに違いない。

紹　介

『日本の文化ナショナリズム』

鈴木貞美著

平凡社　平成十七年十二月　新書判　二八〇頁　本体八六〇円



日本の文化ナショナリズムとは何かを問う著者は、「国家の利益を追求する政治や経済のナショナリズムは、政策によって、その時どきに変化する。だが、文化は何十年、何百年かかっても、なかなか変わらない面を持っている」とする。そして、日本文化が国際的に広く知られる今、あらためて、「日本の文化ナショナリズムの歩み」をたどりなおしてみることの重要性を著者は指摘する。そのような観点から「日本文化」「日本近現代のイメージ」に「新しい見方」を提示しようとするのである。

本書全体の章立ては、第一章　文化ナショナリズムとは何か〔1いま、なぜ、文化ナショナリズムか　2ナショナリズムとは何か〕、第二章　国民国家の創造〔1発明された歴史　2天皇制も発明された〕、第三章　国民国家の形成〔1「国語」の不思議　2「日本文学」は二重の発明　3伝統の評価基準〕、第四章「帝国」の思想〔1大衆ナショナリズムの時代　2普遍主義と文化相対主義　3「大東亜共栄圏」の思想〕、第五章　戦後の文化ナショナリズム〔1敗戦の思想　2日本文化論の季節　3ナショナリズムの相対化へ〕となっている。

まず、第一章では、ナショナリズムの定義、型、ナショナリズムと対立する思想、民族と文化、伝統の発明等への著者の考え方が示される。第二章においては、古代から近代に至る日本人の歴史観・文化ナショナリズムが概観され、近代日本の国民国家への道程が描かれる。そして、第三章では、日本における国語・リテラシー・文学から美術・武士道・修養思想まで取り上げることにより、明治日本の近代化と伝統文化の構図が分析される。第四章は、明治・大正・昭和戦前期までの歴史背景と文化現象を「帝国」思想と国民文化の位置づけとして概観し、第五章は、戦後の日本文化をナショナリズムとの関連性で、戦前のリアクションとして概観している。

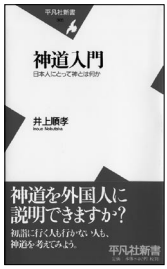
本書の問題意識と視点は、今後、同様の課題設定をする場合の指標となる筈である。

紹　介

井上順孝著

『神道入門―日本人にとって神とは何か―』

平凡社　平成十八年一月刊　新書判　二七一頁　本体八四〇円



「見える神道」と「見えない神道」という二つの概念を設定し、現代社会における神道のさまざまな形態に目を注ぐ「神道入門」。著者の問題関心は、神道の今のような形態は「何を契機に生まれたのか、歴史的に交わされてきた無数の「情報」、そしてその伝達経路というもの」を把握することにある。そのために、「神道がたどった歴史の特徴」「日本社会での伝達経路」に注目しながら、神道の「宗教性がうかがえる側面と、それがほとんど感じられない面」を具体的に考えるため、「見える神道」と「見えない神道」の概念による考察がなされる。

具体的には、「見える神道」とは、神社、神職を中心になされる儀礼、神道にとっての教説あるいは学説、門人組織、近代の神道系教団の教義・組織である。「見えない神道」とは、主として家と地域共同体に関係づけられ、文字化された史料として記録に残ることは少ないが、伝承として生き残るものであり、民俗学はそこに焦点をあてたものであるとされる。

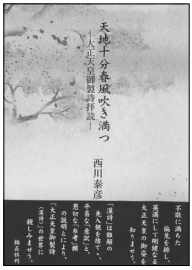
このような両者の関係、歴史的展開と現代の姿を解明するために、神道が誰によってどのように伝えられてきたか、どのような組織やネットワークが作り出されてきたのか、という問題関心を中心に、古代の神社から、神祇制度、近世の神社政策、近代の神社制度、神道系新宗教、神道家、神をめぐる観念、祭祀、神道の教え、「宗教ユーザー」と「宗教メーカー」、家庭祭祀、祖霊と神霊、神前結婚式、世俗の祭、直会、日柄方位、鬼門と方違え、情報ルートの変化…等に着目しながら、「神道」の全体像を体系的に、理論的に叙述する試みがなされている。本書は、神道の捉え方に新しい観点と、新しい分類の方法論を提示する。その枠組は、これまで以上に「神道」を理解し語る上で、有益な考察と分析の契機を読者に与えてくれるに違いない。

紹　介

西川泰彦著

『天地十分春風吹き満つ―大正天皇御製詩拝読―』

錦正社　平成十八年四月　A5判　四八〇頁　本体二八〇〇円



宮内省編『大正天皇御集』に収載される御製詩（漢詩）全二百五十一首の謹解書。有志が結成した刊行会の助成により、大正天皇崩御八十年を記念して出版（栂野守雄会長序文）。書名は御製詩第一首目の「天地十分春」と、最後の「春風吹満老松枝」の句より拝戴。本文は白文・訓読・語釈・意訳・参考（時代状況等の解説）で構成され、難解な研究書ではなく「御聖徳」を仰ぎ奉る趣旨で編著したという（凡例）。大正天皇については近年、伝記や御集関係の出版・再版が相次ぐなど、研究環境が少しずつ向上している。著者は平成十四年に一部公開が許された宮内庁書陵部所蔵「大正天皇実録」、および「大正天皇御製詩集」の諸稿本をつぶさに閲覧した上で、既刊書における詩句の誤植・異同状況を精査し、正確な御製詩の普及と現代に相応しい（高校生にも理解可能な）解説に努めている。例えば、皇太子時代に明治天皇の政務への御精励を詠まれた五言古詩「至尊」（明治二十九年）の「日曜無休息」「日晩始入御」という句について、日清戦争時における広島大本営の様子などを紹介し、はじめて拝誦する人にも容易に歴史的背景への理解が得られるよう配慮している。また序文で南部利昭氏（靖國神社宮司）も引用する七言絶句「臨靖國神社大祭有作」（大正四年）について、起句「武夫重義不辞危」の「義」とは軍人勅諭にいう「忠節」であると語釈し、参考として神社の由緒や歴代天皇の御親拝記録、御製、軍人勅諭などを要領よく紹介している。終戦直後における『大正天皇御集』の普及版公刊計画は、占領下の時局に配慮して一時見合せとなったが、大東塾（影山正治塾長）が「祖国再建の道標」を求めて刊行頒布運動を推進し、昭和二十三年に出版が実現した。こうした関係史についても整理しつつ、聖徳景仰の真情をもって、御製詩を一首ずつ丹念に謹解した好著であり、帯書にもあるように「大正天皇の大御心に学ぶ」希少書として推薦したい。

紹　介

『神道と日本文化』

安蘇谷正彦・椙山林繼・中西正幸・岡田莊司・茂木栄・茂木貞純著　兵庫県神社庁編

戎光祥出版　平成十八年四月刊　四六判　二七〇頁　本体一八〇〇円

兵庫県神社庁設立六十周年を記念する連続講座「神道と日本文化」全六回（平成十七年六月二十六日～九月十一日、國學院大學共催）をまとめた講演集（加藤隆久庁長序文）。第一章「『神道』とは何か」（安蘇谷）は、お祭りの伝統、神社の歴史、神道古典、神道思想史の四素材の考察を通して、「神道とは日本の神々への信仰（意識的信じ方）あるいは信頼（無意識的信じ方）を有する生き方」であることを講じたもの。第二章「発掘された神々のものがたり」（椙山）では、神道考古学の成果をもとに、「はじめは神籬、磐境の祭、それから……社殿の祭になったという簡単な図式にはならない」と、多様な祭祀形態が並存していた可能性に言及している。第三章は「天皇家と伊勢の神宮」（中西）。神宮の式年遷宮について、『延喜式』の定めた法制化の基本要件、諸祭儀・神殿造営・神宝調進の特色、さらに「生活文化、衣食住の原点」・「民族の記憶装置」としての意義を歴史的に概説する。第四章「カミとホトケの境界を歩く」（岡田）では、神道に強い影響を与えた仏教・陰陽道との関係に論及。「現代の神道へ至る大きな転換点は平安中・後期、摂関・院政時代」であり、仏教・陰陽道との交流が「神道」の自立を促したと説く。第五章「風土を作る神々と祭り」（茂木栄）では、奈良盆地の宗教的風土の特色や広島の爆心地における鎮守の森復活運動などの事例を紹介しつつ、日本の集落景観やコミュニティの中心に「神のモリ」があることを民俗学的に解説している。第六章「日本語の中に生きる神道」（茂木貞純）では、「年」、「たべもの」、「彦・姫」、「人」、「力」などの言葉の語源を解説しながら神祭りを中心とした神道の特色について講じている。各章末に《神道一問一答》を収録し、「神道は宗教かいなか」「勾玉の形は何を意味しているのか」といった受講者の質問に講師が分かりやすく解答している。神道学の各専門領域の第一人者による、格好の神道入門書である。

紹　介

『井上毅と宗教―明治国家形成と世俗主義―』

齊藤智朗著　〈久伊豆神社小教院叢書 三〉

弘文堂　平成十八年四月　A5判　三五二頁　本体五二〇〇円

本書は帝国憲法・皇室典範・教育勅語の中心的起草者で明治国家のグランド・デザイナーと称される井上毅（こわし）の、神道・宗教に関する思想や政策構想にみられる「世俗主義」――国家政治における宗教性の放棄、すなわち世俗化を推進する態度――の全体像を捉えようとしたものである。第一章「井上毅の『仏訳四書』序文和訳」では東西思想の共通性を見出した背景について考察し、第二章では帝国憲法発布までの宗教政策構想、とくに第二十八条にみる近代国家の宗教管理権、信教自由・政教分離原則の導入過程を検証する。第三章では皇室典範の即位礼・大嘗祭規定の成立過程を、岩倉具視らとの交流や宮内省図書寮頭時代の古典・法制史調査に着目して考察し、第四章では憲法発布後に起った神祇院設置問題への対応（宮中神祇局構想）が、政教分離原則と天皇親祭主義の制度的確立を目指すものであったと指摘している。第五章では明治二十四年の論稿「国際法ト耶蘇教トノ関係」を分析して、「文明」を国際法の適応基準に据えて条約改正上の宗教的問題を解決した経過を辿り、その思想的背景を第七章「明治日本における「文明」と宗教」で論じている。第六章では文相時代の宗教教育構想と教育勅語の関係を考察し、第八章と終章において井上の儒教・キリスト教・神道への認識を総括し、その思想的問題点にも言及する。「井上の世俗主義がまた、「伝統」と「西洋」とが整合あるいは対立しながら近代化を目指した「明治」という時代に大きく規定されたものであった」（序章）という指摘は示唆的である。これまで個々の政策や法制との関連で井上の世俗主義（または近代立憲主義、政教分離主義など）が指摘されては来たが、本書では國學院大學図書館所蔵「梧陰文庫」を中心とする関係史資料を博捜して、思想形成や問題点を含めた体系的な研究が試みられており、井上毅の研究はもとより、近現代の神道・日本文化を考える上で有益な文献といえる。